

「アメリカの世紀」とアメリカ文化 “The American Century” and American Culture

亀井俊介
KAMEI Shunsuke

はじめに

今年(2001年)は21世紀の最初の年で、いろいろな機会にいろいろな人が、新しい世紀への抱負や、この世紀の展望を述べられています。これに対して、世紀などというものは時間を人工的に区切っただけのことで、時間はそんなものとは無関係に流れているのだ、という冷やかな姿勢もあります。それはまったくそのとおりですが、人工的な時間の単位にも、人間の営みにある種の「けじめ」をつける効用はあるように思います。この「けじめ」によって心をひきしめられたり新しい希望をかき立てられたりするのには、決して悪いことではないでしょう。私のように文化の勉強をしている者にも、世紀という単位によって文化の展開のイメージがとらえやすくなるのがしばしばあります。

そこで今日は、いま過ぎ去ったばかりの20世紀を、まとめて振り返ってみたい。20世紀は、世界史的な観点から、「アメリカの世紀」だったとよくいわれます。これもまたそのとおりだという思いを、なかなか否定できません。日本はこのアメリカに一度挑戦しましたが、見事に敗れました。現在の状況を見ますと、政治的にも、軍事的にも、あるいは経済的にも、アメリカの圧倒的な影響下にあります。いわばアメリカの傘下に入っている。では、文化的にはどうか。私たちは長い歴史をもつ日本の文化に誇りをもっていますから、歴史の浅いアメリカの文化に抵抗感もありますが、アメリカ文化の傘が20世紀に世界をおおうものになっていることは、これまたどうも否定しにくい。というわけで今日は、「アメリカの世紀」といわれる

歴史の展開の中で、アメリカの文化はどういう役割を演じ、どういう意味をもってきたかということ、そのほんの一端なりともふり返ってみたいと思うのです。

1. ヘンリー・ルースの「アメリカの世紀」論

「アメリカの世紀」という言葉が世界に広まったのは、雑誌『タイム』や『ライフ』の創刊者ヘンリー・ルース (Henry R. Luce) の力によるところが大きいようです。彼は『ライフ』の1941年2月17日号に、「アメリカの世紀」(“The American Century”) という題の論文を発表し、アメリカが「自由と正義の理想の原動力」(the powerhouse of the ideal of Freedom and Justice) となって20世紀の「世界」をリードすべきことを訴え、大きな反響を呼んだのです。

1941年2月というと、日本の中国やインドシナへの武力進出があつて、日米関係もたいそう緊張していましたが、一般にヨーロッパの方を向いていたアメリカ人の目には、ヨーロッパで猛威をふるうナチス・ドイツの脅威が際立って見えた時期でした。1939年9月、ドイツがポーランドに侵入したことによって、第二次世界大戦が始まっています。しかも、自由主義陣営は旗色が悪く、40年6月にはフランスのペタン政権がドイツに降伏、9月には日独伊軍事同盟が成立し、ドイツによるロンドン爆撃も激しくなっていました。アメリカ政府はしだいに中立の立場をすて、自由主義陣営を応援する態度に傾いてきました。そして40年の暮には、ローズヴェルト大統領の言葉を借りれば、「デモクラシーの兵器工場」(arsenal of democracy) となる姿勢を明らかにしたわけでした。しかし、国民の間には、アメリカは外国のことに口出しすべきではないという伝統的な「孤立主義」(isolationism) が強く残っていました。とくに、ヨーロッパの複雑な国際関係にまきこまれてもろくなことはない、と多くの人が信じていたのです。

こういう時に、ヘンリー・ルースは「孤立主義」に反対、アメリカがいまこそ「インターナショナルイズム」に立って、国際的な役割を果たすべきことを強調したのでした。つまりもっと積極的にデモクラシー諸国を応援

すべきだ、というわけです。ただその思いを、単にアメリカの政策としてではなく、本来あるべきアメリカ精神の発揚として主張しようとした。そこに、20世紀を「アメリカの世紀」と呼ぶ意味が生じたわけです。

いいかえますと、この時点では、ルースはまだ「アメリカの世紀」が実現したといっているのではありません。彼はアメリカが「世界」をリードするようになることを、「ヴィジョン」（未来像）だと述べています。つまりそうなることへの希望、期待を語っているのですね。

皆さんよくご存知の通り、この論文の10ヶ月後、1941年12月8日（アメリカでは7日）の日本軍の真珠湾攻撃によって、アメリカは一挙に全面的に孤立主義をすて、第二次世界大戦に参加、というよりむしろその先頭に立つ。そして戦争に勝利し、世界の超大国になって、ルースの「ヴィジョン」を現実にしたといえます。「アメリカの世紀」が名実ともに世界の認めるものとなったのです。しかしこの論文は、まだアメリカのリーダーシップの夢を語っているのであり、その意味では多分に精神論、文化論でもある。そしてまさにその点に、私の文化史的な観点からすれば、この論文のおもしろさがあるのです。

ここでちょっと視野を広くして、世界の歴史をふり返ってみましょう。アメリカは、西欧社会においては明らかに後進国でした。17世紀後半から18世紀にかけての西欧社会は、ごく大ざっぱに一言でいえば、「フランスの世紀」だったでしょうね。フランスの国土は大きく、「太陽王」と呼ばれたルイ14世（1636-1715）は、全ヨーロッパに君臨しました。豪華絢爛たる宮廷文化が出現し、ヴェルサイユ宮殿はその象徴なんです。周辺諸国の宮廷はみなその真似をしました。私たちが「花の都パリ」と呼ぶものも、多くはこの時代の産物なんです。そしてフランス語は、遠くロシアの王侯貴族などもこぞって用いた国際語でした。ただその文化が、フランス大革命（1789）によって、リーダーシップをイギリスに譲ることになったのです。

そして19世紀は、「イギリスの世紀」ということになります。ナポレオン戦争でフランスを打ち破った、その軍事力のせいばかりではありません。イギリスは18世紀後半から、世界に先駆けて産業革命を成功させた。人格の形成においても、外面的な上品さを重んじるフランス的宮廷文化の影響

から脱して、内面的な実質や現実的な行動を重んじるジョン・ブル精神を育てます。こうして、強力な田舎王国であったものが、島国であることもうまく利用して海洋国家となり、19世紀には「太陽の沈むことのない」帝国となり、世界に君臨したのです。英語がフランス語にかわって国際語になったということもいえそうですね。

アメリカは、遥かに遅れて世界の舞台に登場してきました。ヨーロッパの辺境（フロンティア）であり、基本的には農業国であり、しかも南北戦争までは奴隷制度という前近代的なものをかかえ、原初的な自然に直面しながら生きる人間をもとにした感情や思想を養いながらも、アメリカ大陸の外に文化を広げる余裕などはなかったのです。ただ南北戦争後、産業国家として急成長しました。資源豊かな広大な国土が、おびただしく流入する移民の労働力などとあいまって、その成長を助けたことはいまでもありません。そして第一次世界大戦後、戦争で疲れきったヨーロッパ諸国を尻目に、ようやく世界の大国としての姿をはっきりさせてきたばかり、という状況でした。

ですから、20世紀を「アメリカの世紀」などというのは、やはり「ヴィジョン」であった。しかしヘンリー・ルイスは、その「ヴィジョン」を実現するための方策を具体的に考えてもいました。彼はアメリカが世界に提供すべき（あるいは提供できる）ものを、次の四ヶ条にして説明しています。

第一は経済力。これはいま述べたことから、もうお分かりですね。20世紀初頭までに、アメリカの生産力はイギリスをしのいで、世界第一になっていました。が、単に生産力だけでなく、自由経済そのものの活力をルイスは信じていました。で、そういう経済力を、自由貿易によって世界にひろめ、恩恵を人類に及ぼそう、と彼はいうのです。

第二は技術力。19世紀の後半、アメリカは「発明王」エジソンなどによって代表されるように、科学技術、機械文明を見事に発達させてきた。だからいま、その技術と、技術者（これには医師から教師までの幅広い人材を含みます）を、アメリカは世界に向けて提供することができる、提供すべきだ、とルイスはいいます。

第三に、「全世界の善きサマリア人」（the Good Samaritan of the entire

world) にアメリカ人はなるべきだ、とルースは主張します。「善きサマリア人」というのは、聖書 (*Luke*, 10: 33-37) で「苦しむ人の真の友」の意味です。世界中の貧しく飢えている人々に人道的な援助を与えよう、というわけですね。

第四には、「偉大なアメリカ的理想への情熱的な献身」(a passionate devotion to great American ideals) を主張します。この「偉大なアメリカ的理想」なるものを、ルースは、自由を愛する精神、機会の平等を重んじる思い、独立（自己信頼）と協力の伝統、という言葉で説明しています。それを世界に及ぼそうというわけです。

この四つの主張には、しかし、いま読み直すと、いい気なもんだという思いのするところが多分にあります。経済力と技術力を後進国に押しひろめようという第一と第二の主張は、悪くすると、経済力と技術力によるアメリカ拡張主義、新型の帝国主義、植民地主義ということにもなります。そこで、それを補うものとして、第三と第四の崇高な精神の主張が出てくるのですが、これはともに独善的な自己満足の傾きもなしとしません。「偉大なアメリカ的理想」だなんて、抽象的にはいくらでも立派なことがいええます。現実には、アメリカ自体がそういう理想をどこまで実現していたか、という疑問を呈したくもなります。ああやっぱり、ルースの「アメリカの世紀」論は、ただアメリカを善しとする「ヴィジョン」だったんだ、という批判も十分に成り立つような気がいたします。

2. アメリカ文化の世界進出とそれへの反撃

それでも、ヘンリー・ルースの見るところ、アメリカには彼の「ヴィジョン」を支える材料がたっぷりありました。その最も有力なもの少なくとも一つが、彼の四ヶ条には入っていないんですが、アメリカの文化力だったと私は思うのです。アメリカの文化は、アメリカのインターナショナルな活動や役割をすでによく証明していたのです。ルース自身が、同じ論文の中でこんなことをいっています。

アメリカのジャズ、ハリウッド映画、アメリカの俗語、アメリカの機械や特許製品は、じっさい、サンジバルからハンブルクまでの世界中のあらゆる社会が共通して受け入れている唯一のものだ。

ジャズと映画は、20世紀のアメリカ大衆文化の代表ですね。機械や特許製品というのは、大衆車から電化製品までを含めた、アメリカの生活文化の産物でしょう。アメリカの俗語 (American slang) というのは、「オーケー」とか「オーライ」とか、あるいは映画 (motion picture) を movie というとかの類でしょうか。いずれにしろ、アメリカ的な簡便な言語表現をさしていると思います。ルースは、そういうものが、サンジバル (アフリカ東海岸の島で、当時はイギリスの保護領でした) からハンブルク (もちろん当時敵国になりつつあったドイツの都市です) まで、というのは世界中のあらゆる社会ということですが、そこで共通して受け入れられている事実に注目する。いや、こういうアメリカ文化の産物以外に、こんなに普遍的な評価をうけているものはないというのです。

じっさい、アメリカ文化の産物は、20世紀に入るとともに、たぶん他のどの国の文化産物にも増して世界中に進出していったのではないのでしょうか。第一次世界大戦後のアメリカの繁栄がこの傾向をさらに推し進めたことは、間違いありません。とくに注目したいのは、ここにいう文化産物が、電話とか自動車とかといった、形ある製品に限られないことです。モダン・ガール (モガ) やモダン・ボーイ (モボ) のファッションから、男女交際の仕方、恋愛・結婚・夫婦中心の家族のあり方といった生活風習、俗にいう「アメリカ的生活様式」 (American way of life) までが、世界の国々に浸透していたのです。

これに対して、強い抵抗がなかったわけではありません。日本でも、日米関係が緊張を増してきていた昭和の初め頃から、アメリカの文化的進出に対して、警戒や反撃の叫びがたかまりました。1930年、池崎忠孝という評論家は、『世界を脅威するアメリカニズム』という本を出しています。ここに「アメリカニズム」というのは、この言葉本来の「アメリカ英語」とか、「アメリカ合衆国に対する愛国心」の意味ではなく、アメリカの思想、

アメリカ文化の精神的な成り立ち、といったほどの意味です。池崎はそれを、「機械の福音」だと説きます。つまりアメリカ文化なんてものは、機械本位の物質文明であって、崇高な精神性はない、そのためにアメリカ人の生活は享樂主義に墮している、というんです。そしてこんなふうに罵倒するんですよ。

キネマを見、ドライブを楽しみ、ラヂオを聴き、スポーツを喝采し、晝はクラブに入りびたつてカルタを弄び、夜はダンス・ホールに尻を据えて男女の自由な交際を謳歌するといふのが、近時のアメリカにおける享樂主義の生活だ。かゝる生活を追求して倦むところを知らないアメリカ人の欲望は、恰も刹那の官覺的刺激をもつて無上の悅樂とする未開人の欲望と選ぶところはない。

こういうアメリカニズムの墮落した文明にまき込まれないように、古い歴史と伝統をもつ日本人は、高貴な日本精神をたかめなければいけない、というのが池崎の持論のようです。池崎のこの論は言葉の激しさが目立ちますけれども、アメリカは歴史も伝統もない国だから、アメリカ文化は低俗だという発想は、日本の多くの知的指導者がもったし、いまもしばしば多くの日本人が分ちもっているところだと思います。

ヨーロッパでも、これと似た反応はたっぷり見られます。「フランスの世紀」「イギリスの世紀」をつくった国々の人が、自分の古く洗練され、精神的に高尚だと信じる文化を誇りにし、アメリカの新興文明を輕蔑するのは、むしろ自然な現象というべきかもしれません。とくにフランス人となると、あの American slang みたいなものまで目の敵、いや口の敵にし、その輸入というか、使用に反対する動きが強いようです。

3. 普遍性と解放性

しかしながら、こういう反感や反撃を乗り越えて、アメリカ文化は世界に浸透してきました。そして第二次世界大戦後には、ヘンリー・ルースのいう「アメリカの世紀」を現実的なものにする大きな力となった。逆にい

えば、文化の領域においては、世界のアメリカ化がますます顕著になってきました。かつての敵国であったドイツや日本の一般民衆が、むしろ積極的にアメリカ文化を受け入れ、アメリカの自由経済を拒否していた共産主義諸国でも、アメリカの文化産物をいま喜んで取り込んでいる有様です。

問題は、なぜこうなってきたのかということです。もちろん、第二次世界大戦後、アメリカは未曾有の超大国となり、その国力がアメリカ文化を世界に押し出したことは明らかです。だが、それだけではないでしょう。アメリカ文化そのものの基本的な成り立ち、あるいは内在的な力が、大きく働いていると私は思います。

まず第一に、アメリカ文化は本来的に、普遍性を目指す特質を備えてきたということがいえるんじゃないでしょうか。

アメリカは世界中の人種が集まってできている国です。ひと頃までは、これら多様な人種が融合してアメリカ人という新しい人種をつくるんだ、アメリカは「人種のるつぼ」だということが説かれましたが、この頃はそれぞれの人種やその背負っている文化の独自性を強調し、アメリカを多元文化主義の国と主張することが流行のようになっています。それはたぶんその通りなのでしょう。ただし、こうして集まっている人たちの圧倒的な多くは、それぞれ流に「サクセス・ドリーム」をもって苦闘している庶民であることも忘れてはなりません。成功を求めて忙しく右往左往しています。多元的な文化なるものは、決して固定してはいないのです。それに加えて、先ほど述べましたようにアメリカは自由経済の国ですから、その文化産物ができるだけ幅広く大勢の人に売れることを目指します。アメリカ文化は必然的に大衆文化の特質をもち、人種や階級を超えて万人にアピールする普遍性を育てることにもなるのです。

その有様を、大衆文化の華である映画に見てみましょう。映画がストーリーをもってスクリーンにうつされるようになったのは、いまからちょうど100年ほど前、20世紀の初頭のことです。その勃興期の映画産業を代表したのは、フランスとアメリカでした。フランス映画は、あくまで一般的な傾向としての話ですが、芸術志向が強かったようです。演劇の技法などを用いて、知的な観客を引きつける努力などをします。それに対してアメ

リカ映画は、移民やその子供たちといった貧しく雑多な庶民を相手とする娯楽として発達しました。そして徐々に中流階級相手に幅をひろげてきたのです。

こんなふうでしたから、アメリカ映画はまず誰にも分かる表現を追求しました。どんな人種のどんな階層の人が見ても、登場人物の思考や感情の動きが手に取るように分かり、納得ができ、共感もできる表現ですね。教育や教養がなくても分かる表現でなければなりません。それを見事に実現した初期の代表が、チャーリー・チャップリンでしょう。第二次世界大戦後では、マリリン・モンローもその代表的な一人だと思います。

チャップリンはイギリスの名もない旅芸人でしたが、アメリカに来て、1910年代のなかばから映画に出演し、普遍性を身につけていきました。チャップリンといえば浮浪者——ぶかぶかの靴とだぶだぶのズボン、窮屈な上着に山高帽、口髭をたくわえ、しなやかな杖をふりまわす姿を、誰も思い浮かべます。この種の姿は、じつはヨーロッパの喜劇映画でおなじみの一つのタイプだったらしいんですが、チャップリンはそれに工夫を加え、まことに雄弁な動作と掛け合わせていく。そしてこの不調和な姿に、貧しい庶民の現実と夢とが盛り込まれることになるのです。しかもこの浮浪者が、そのままの姿で、紳士、詩人、夢想家、絶望した人、恋する男、失恋した男など、あらゆる人間になります。そういうさまざまな人の思いを、表情や身のこなしによって、生き生きと表現してみせるのですね。ロバート・スクラーという批評家は、「浮浪者は普遍的な人格 (a universal character) だった」(*The Movie-Made America*, 1975) といっていますが、その表現も普遍的だったのです。

映画のなかのチャップリンが「浮浪者」(the Tramp) だったとすれば、映画のなかのマリリン・モンローは「おつむの弱いブロード娘」(the Dumb Blonde) でした。乳房とお尻が大きいのに反比例して頭の中身は乏しく、それだけに天真爛漫にふるまって、いろんな騒動をまき起こすという役どころです。だが本物のモンローは、おそろしく頭がよく、また常に「すばらしい女優」(a marvelous actress) を目指して努力していた人でした。で、映画会社から押しつけられたこの the Dumb Blonde 役を、すばらしい男性

に愛されたいとか愛したいとかという、普通の女の子の夢をもった「普遍的な人格」に昇華してしまい、その姿をのびのびと自然に、そして魅力たっぷりに表現するのです。なかば口をあけて相手を誘う顔の表情から、尻をふって歩く有名な「モンロー・ウォーク」まで、まさに誰にも分かり、男なら気をそそられ、しかしその無垢さのゆえに手出しができず、むしろ彼女を自分こそが守ってやりたいという気持ちにさせる表現にあふれていました。だからこそ、大衆が彼女をスターにした。こうして、彼女は「隣の女の子」の親しさを全身で示しながら、アメリカの未曾有の「セックス・シンボル」となったのです。

アメリカ映画はこのように、万人向きの表現を育てました。だがそれだけではない。内容においても、アメリカ映画は、さまざまな文化的背景をもつ多様な人々が理解し賛同できるものを追及してきた。アメリカ映画を経営的に育ててきた大きな勢力にユダヤ系の人たちがいますが、彼らは自分たちのマイノリティとしての立場を十分に意識し、マジョリティ人種などからの反発を恐れて、映画の内容から努めて人種的特質を排除してきました。もちろん、インディアンや黒人への偏見は顕著で、中国人や日本人への蔑視も随所に現れます。近頃のアメリカ映画史の研究などは、むしろその面を強調してもあります。しかし全体的に見ますと、たとえば正義なら誰にとっても明らかに正義であるもの、恋愛なら誰にとっても美しい恋愛と思えるものを、描こうとしてきた。疑問の余地のない勧善懲悪、善男善女の純真な心によって苦難を乗り越えて成就するたぐいの疑問の余地なく正しい恋愛と結婚、というような普遍的モラルが、ハリウッド映画の十八番のテーマとなってきたのです。

それは、たとえば何が善で何が悪であるか分からぬ複雑な人間の状況とか、男女の不倫関係をめぐる微妙な心の動きとかを描こうとするフランス映画などと比べると、単純で、芸術性に欠けるようにも思えます。だがその素朴な普遍的モラルによって、アメリカの映画はさまざまな文化のなかに生きる人々に幅広くアピールし、結局、世界を征服したのでした。

さて、しかし、こういう普遍性だけで、アメリカ文化が世界の人の心をとらえ得たとはなかなか思えません。普遍性だけでは、文化は平板で単調

になってしまうでしょう。もう一つ、もっと積極的に、心を躍らせる要素があるはずです。私はそれは、アメリカ文化の解放性だと思います。相変わらず映画を例にして、話を続けることにしましょう。

映画のなかのチャップリンは、貧しい浮浪者がいかに食べ物やねぐらを見つけ、どのようにして仲間や愛する女性を獲得するかといった人生の根本問題を演じます。だから普遍的なのですが、彼はけっして形式的な道徳の権化ではない。貧しさから生まれた抜け目なさ、機敏さ、それに反抗心があり、うまく立ちまわって警官やら尊大な金持ちやらをやっつけます。時にはいろんな失敗もしでかしますが、きわどく難局を切り抜け、恋人を手に入れ、または浮浪者としての自由を回復して、ステッキをふりながら長い道を去っていく。観客は何か痛快な解放感を得る仕組みになっています。

チャップリン映画は基本のところでは社会的な作品であって、喜劇ですけれども、反体制的です。モンロー映画は、社会的というよりも風俗的で、一見したところ、反体制などという深刻な問題をかかえてはいません。しかしモンローも、*the Dumb Blonde* の肉体美をごく自然にふりまいて、当時の社会風俗、常識的でお上品ぶった世の中の秩序を、快くひっかきまわすのです。

チャップリン映画は1920年代から30年代、アメリカが第一次世界大戦後の経済的繁栄から未曾有の不況へと移った時代に絶頂を迎えましたが、モンロー映画は1950年代に咲きました。第二次世界大戦後の、まさに「アメリカの世紀」が実現していく時代ですが、当時、すでにソ連との冷戦に入っており、アメリカはデモクラシーの国のすばらしさを世界に示すために、上品な秩序ある道徳国家のイメージの確立に努めていました。大統領は「アメリカのお爺ちゃん」と呼ばれたアイゼンハワー。彼の治世は「大人の時代」と呼ばれます。しかし一般庶民は、そんな社会に窮屈な気持ちも抱いていました。とくに若者はそうです。

モンローはそういう時代に、自然のままの肉体の魅力を誇示して、スターへの階段をのぼっていきました。当然、道徳派からは非難をこうむります。そしてたとえば、有名なヌード・カレンダー事件が持ち上がりました。1949年の夏、まだ無名の彼女は50ドルの金が必要で、ヌード写真のモデル

になり、その時の作品のうち2枚がカレンダーに採用されました。通説にしたがいますと、1951-2年、彼女がようやくスターとして認められ出した頃に、そのヌードのモデルがモンローであることがばれてしまいます。映画会社はあわてふためき、彼女にその事実を否定させようとしてきました。しかし、記者会見の席で、モンローは平然と事実を認めた。しかもヌードになった理由を聞かれると、「お金がほしかったからです」と言い切った。だがこのことによって、彼女はかえって世間の共感をかう。そして一挙に、民衆の大スターになってしまうのですね。

民衆は、重苦しい形式的な道徳からの解放を求めていた。モンローはそういう一般の思いを感じ取り、また自分もその種の解放を求めて、女優としての向上に努めていたといえそうです。私の好きなモンローの名文句に、「セックスは自然の一部です。私は自然と協調していきます」という言葉があります。モンローは人工的な、いわばセックス産業が扱うようなセックスは嫌悪していました。自然のままの人間の美を重んじていたのです。

そして、1960年の大統領選挙でジョン・F・ケネディが当選します。43歳。選挙で選ばれた大統領としては、アメリカ史上最年少です。こうしてアメリカは、1960年代には「若者の時代」になる。モンローは、1962年に急死してしまいましたが、死後、若者文化と結びつけられていきます。フェミニズムの運動にも取り込まれていった。そして、自然のままの人間の美の化身として、ますます人々の心を集め、ついにいまでは20世紀の「女神」とまでいわれる存在になっている。単にアメリカ人が彼女をそう見るだけではありません。世界の数多くの人々が、彼女を見ることによって、快い解放感を味わうのではないのでしょうか。

アメリカ文化のこういう普遍性と解放性は、もちろん映画だけのものではありません。私は不案内ですが、音楽においても、たとえばジャズのような、もともとローカルな黒人の間で生まれたものでも、人間の感情を根本から解放するところがあり、普遍性を養っていったようです。イギリス人のグループであったビートルズも、アメリカを経由することによって、普遍性と解放性をたかめ、世界のものになったのではないのでしょうか。

絵画については、もう時間がなくなってきましたので、マリリン・モン

ローとの関連で、アンディ・ウォーホルに一言だけふれてみたいと思います。ウォーホルはマリリンの死の報せを聞くと、すぐに、モンローの白黒の写真をもとに、「シルク・スクリーン」という方法で、23枚のポートレートを仕立てました。金地にモンローを画いた「ゴールド・マリリン」から、20フィートの大キャンパスに100ものモンローの顔を並べた「マリリン・モンロー祭壇画」^{ディンティク}までありますが、要するに同じ顔に、髪の毛は金、目の上は青、唇はどぎつい赤といった具合に、卑俗な色を塗った形です。それぞれに微妙な違いはありますが、「繰り返し」仕事の産物です。いかにもモンローが大量生産時代の産物であることを示していて、俗悪の印象をぬぐえません。しかしモンローの美を個人所有の「芸術」から解き放った感じはあります。見る人がモンローを身近にたぐり寄せ、自分の好みに合わせて自由にその美を味わえるような気分にさせるかもしれません。ウォーホルが代表するアメリカのこういうポップ・アートもまた、アメリカ的な普遍性と解放性の産物といえるような気がします。

いま広い意味でのアメリカの大衆芸術のことを話しましたが、アメリカの生活文化となりますと、同じことがもっと具体的な形で理解できると思っています。たとえばTシャツやジーンズに代表されるアメリカ生まれの衣料。これは誰でも何の訓練もなく身につけられ、軽快そのものです。つまり普遍性と解放性の化身といってよいですね。同様にして、「スカッとさわやか」のコカコーラや、ハンバーガー、ホットドッグといった簡便な飲食物から、自動車を代表とする乗り物、あるいは電話、ラジオ、テレビ、パソコンなどの伝達手段にいたるまで、アメリカの文化産物のあらゆるものが、誰にもそれを攝取・利用でき、しかも自分の個性に応じて、いわば自由に心躍らせることができるものです。

4. 日本にとっての意味

「アメリカの世紀」は、否定的な側面をたっぷりかかえこんでいました。ヘンリー・ルースは、アメリカ国内における貧富の懸隔や人種差別など、「自由と正義の理想」に反する現実にはまったくふれることなく、世界に向

けては、アメリカをそういう理想の「原動力」として持ち上げていたわけです。軍事的にはもちろんですが、政治的、経済的にも、独善的なアメリカ中心主義がうかがえます。しかし、アメリカの文化は、確かに卑俗さをかかえこみながらも、あるいはまさにその卑俗さに助けられて、普遍性と解放性を養っていた。そして世界中の人の心を高揚させる原動力の一つとなってきました。今日は文学のことにふれる余裕がありませんでしたが、20世紀のアメリカを通観して私などが最も目を見張るのは、文学をひっくり返したアメリカのこういう文化力の、ダイナミックな展開の姿であります。これがあって、20世紀は「アメリカの世紀」たりえた。そしてこれがある限り、21世紀になっても、まだ「アメリカの世紀」は続きそうに思えます。

私たちは、アメリカの文化に賛成するのも反対するのも自由だといえるでしょう。日本の文化を顧みる時、これと対照的な際立った傾向があるように見えるのです。

一つは、普遍主義と対極の独自主義です。日本文化は日本人という一つの民族をもとにし、長い歴史と古い伝統によって、ユニークな存在になっている、たとえば、「もののあわれ」「わび」「さび」といった日本的な情念は、西洋人には絶対に分からない深い味わいをもつものだから、このユニークさを大切にしよう、といったたぐいの思いは、いまも多くの人がもっているのではないのでしょうか。

もう一つは、これと結びつきますが、解放性に対する保守性です。解放性というのは、形式化した秩序にゆさぶりをかけ、自由に、新しい価値を創造しようという試みの尊重ですね。もちろん、これを求める日本人も多いんですが、一般的には、新しい価値の創造よりも、これまであった価値をさらに高め、さまざまな文化産物の内容や表現をさらに洗練させる方向に、より多くの努力を払っているように思えます。

私は、日本文化のこういうユニークさも、洗練された美も、大切にしたいと思います。またその発展にも努めたい。しかし同時に、日本がいま国際社会の真只中に入って、文化の面でも国際性を育てなければならぬ状況にあるのは、否定しようのない事実です。それは、日本文化のユニークさと美とが生き残り、発展するためにも、またひょっとしたら「日本の世紀」

を出現させるためにも、避けて通れないプロセスであるでしょう。とすれば、アメリカの文化の普遍性と解放性を理解し、これを積極的に取り入れる努力も、これからさらになされてよいように私は思います。

* * *

■この小文は2001年2月23日、国際ロータリー第2570地区大会における講演をもとにしています。はじめ「アメリカ文化——マリリン・モンロー時代」という題が設定されていたのですが、直前になって「アメリカ文化と日本」に題の変更を求められ、私としてはそれを受けながら、前からの本誌との約束にもかかないような頭題のテーマに内容を再構成した次第です。